

兵庫県における縄文時代の遺跡分布とその背景

福岡 武史

キーワード: 縄文時代, 自然環境, 生活, 遺跡分布, 兵庫県

はじめに

本研究は、但馬地域を中心として、兵庫県における縄文時代の遺跡分布の特徴とその背景を自然環境の面から考察するというものである。研究のねらいは、気候変動や地理的条件と縄文人の生活を関連付けて考察することから、遺跡の分布状況の背景となる環境を探ることにある。

兵庫県の縄文遺跡は、他県と比べ数は多くなく、大々的な研究が行われていないことから、現在明らかになってきている縄文時代の全国的な傾向をふまえ、兵庫県の遺跡を見ていくこととする。

1. 兵庫県における縄文遺跡の分布とその特徴

(1) 兵庫県の遺跡分布

i. 概観

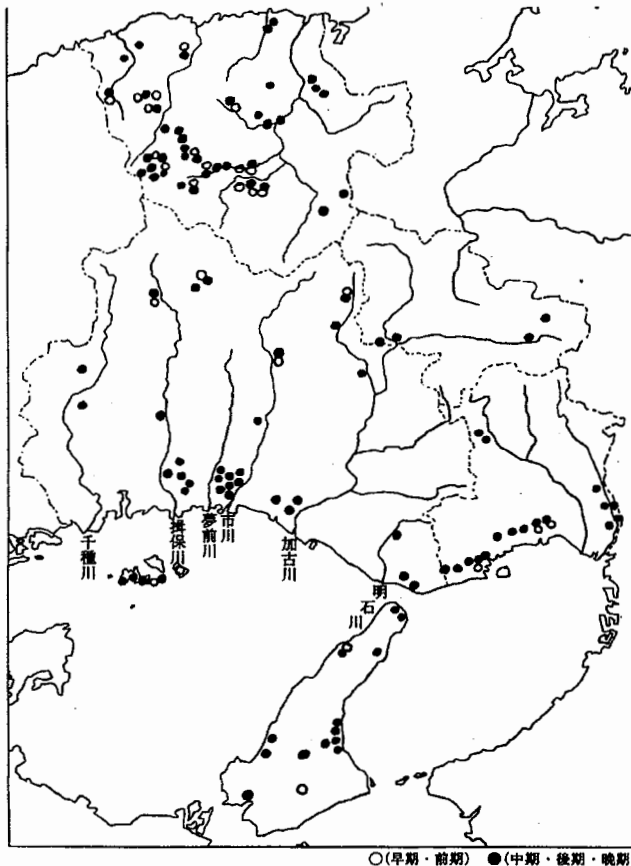


図1は兵庫県の縄文遺跡の分布図で、前半期と後半期の遺跡を表している。縄文時代に狩りで使われた石鏃は、様々なところで採集されているのだが、石鏃が身体に刺さった猪などが逃げのび、死んだ場所で発見されるということがありえること、採集地点から遺跡が発見されることはむしろ稀だということから、図には石鏃採集地点は示しておらず、土器などの特徴的な遺物や明確な遺構が見つかった遺跡について取り上げてある(神崎, 2002)。兵庫県では、草創期のもと思われる土器は発見されてはいるものの、その数の少なさと、未だ不明な点が多いことから、最古の縄文遺跡は早期のもだとされている。

図1 兵庫県の縄文遺跡の分布

出所:「加古川水系と古代文化」(神崎勝, 2002)より

図1から、早・前期(前半期)、中・後・晩期(後半期)ともに但馬地域に遺跡が多く、特に前半期の遺跡はほとんどが但馬の山間部に集中していることがわかる。瀬戸内海側の主要河川の中流域には遺跡は少なく、特に加古川中流域ではほとんど空白である。瀬戸内海沿岸部には、前半期の遺跡は少ないものの、中期以降の遺跡が緻密に分布している。

ii. 考察

兵庫県の遺跡分布は、図1からわかるように地域差が見られる。そこで、遺跡の最も集中する但馬地域は後ほど詳しく触れることとして、全体的な特徴についてここで考察しておく。

兵庫県の遺跡分布の特徴として、中国山地山間部と瀬戸内海沿岸部に遺跡が集中していることがある。山間部に集中する遺跡は、中国山地に沿って、篠山盆地を経て京都盆地までつながる文化圏の一部をなしていたと思われる。兵庫県の山間部から、広島、岡山の山間部で出土するものとよく似た特徴を持った土器が出土すること、中部以北、九州地方で使われていた土器と同じ特徴を持つ土器が出土することから、山間部の遺跡は、山沿いを行き来した縄文人の交通ルートの跡であるといえる。

瀬戸内海沿岸部の遺跡は中期以降に増加する。このことは、岡山、広島、香川などの各県で、中期以降に遺跡が低地に進出するという傾向と共通していると思われる。

兵庫県の縄文遺跡の大きな特徴として、日本海、瀬戸内海と南北両端を海に面しているにも関わらず、貝塚が少ないことがある。日本海沿岸の貝塚遺跡は、中谷貝塚、長谷貝塚、荒原貝塚とわずかに3ヶ所であり、全てが豊岡市に位置している。瀬戸内海沿岸の貝塚遺跡となるとさらに数は減り、高砂市に、加古川と市川との間に位置する日笠山貝塚があるのみである。

隣接する岡山県には瀬戸内海沿岸に貝塚が多数あり、その位置は複雑に入り組んだ内湾近くに限定されている。内湾の形成される地域では、貝類の繁殖に適する有機物が多量に含まれた土砂が、河川などにより陸上から流れ、湾内に停滞したことが貝類繁殖の好条件となったものと推定される。県内ではこのような好条件の土地は少なく、採集できる貝の量が少なかったことが、貝塚遺跡がわずかしか存在しないことの原因であると考えられる。

2. 但馬地域における縄文遺跡の分布とその特徴

(1) 但馬における遺跡分布の概観

前章から、兵庫県における縄文時代、特に前半期の遺跡は但馬に集中していることがわかった。この章では、その理由を探りながら但馬の遺跡分布について詳しく見ていくこととする。

図2と図3は、但馬の遺跡分布図である。発掘調査が行われ、縄文時代のどの時期に対比されるかがはっきりとしている遺跡をできる限り取りあげているが、但馬の全ての縄文遺跡を取りあげるには至っていない。▲は住居跡などの生活遺跡を、□は遺物の散布地をそれぞれ表している。

図2は、縄文時代前半期(早期～前期)の生活遺跡と遺物の散布地を表したものである。特徴的なこととしては、兵庫県全体の遺跡分布のところでも触れたが、中国山地の山間部に多くの遺跡が集中していることがある。

図3は、縄文時代後半期(中期～晩期)の分布を表したものである。前半期の分布図で見られた、山間部に集中する遺跡は、後半期になると数が減少し、前半期に比べ遺跡が東よりに展開しているのがわかる。また、前半期にはまったく遺跡の見られなかった豊岡市周辺に遺跡が進出している。この新たに豊岡の山裾に出現した3つの遺跡は、全て貝塚遺跡であり、標高約6～11mに位置している。

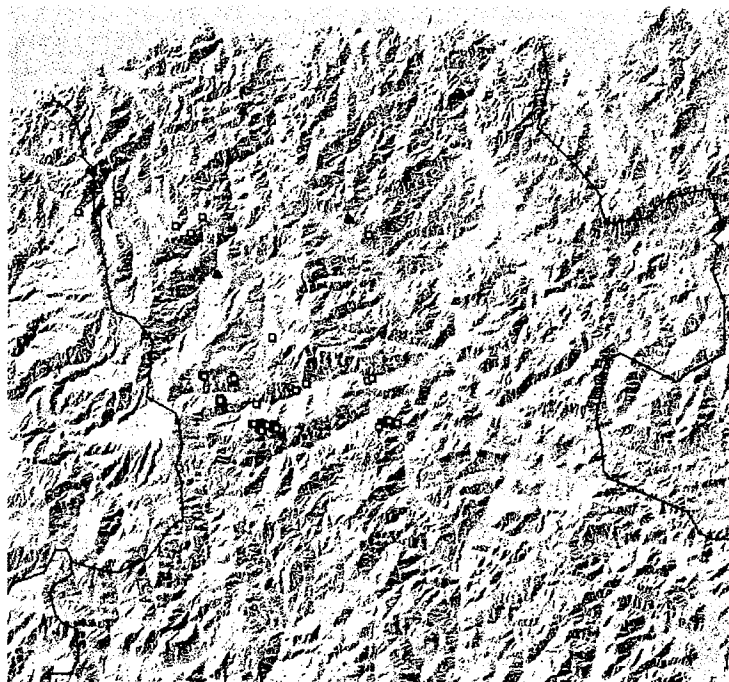


図2 但馬地域の縄文前半期の遺跡分布
出所:『兵庫県遺跡地図』を基礎とし、本人が作成

▲ 生活遺跡
□ 散布地

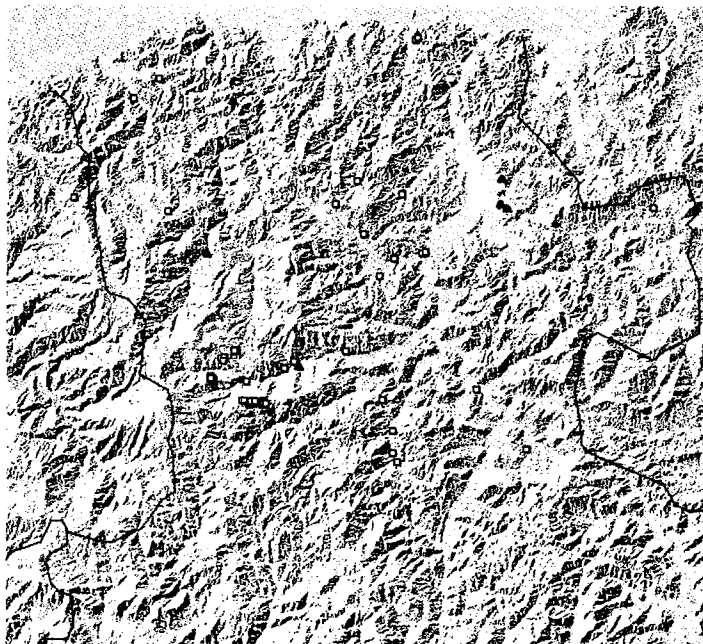


図3 但馬地域の縄文後半期の遺跡分布
出所:『兵庫県遺跡地図』を基礎とし、本人が作成

▲ 生活遺跡
□ 散布地

(2) 仮説と検証1

i. なぜ山間部に遺跡が多いのか

縄文時代の生活では、食料の確保が最も重要視される場所であった。その考えにしたがって、但馬地域というよりも、兵庫県の縄文遺跡がなぜ中国山地の山間部に多く分布しているのかを考察すると、植生に大きな原因があるという仮説が浮かび上がってくる。但馬の山間部でしか獲得できない植物性食料資源があり、兵庫県の縄文人はそれに依存し、集まったのではないだろうか。

兵庫県の森林分布図(図4)を見てみると、但馬の山間部を中心とした標高の高い地域では、ブナ、ミズナラという温帯落葉広葉樹林が広がっているのがわかる。

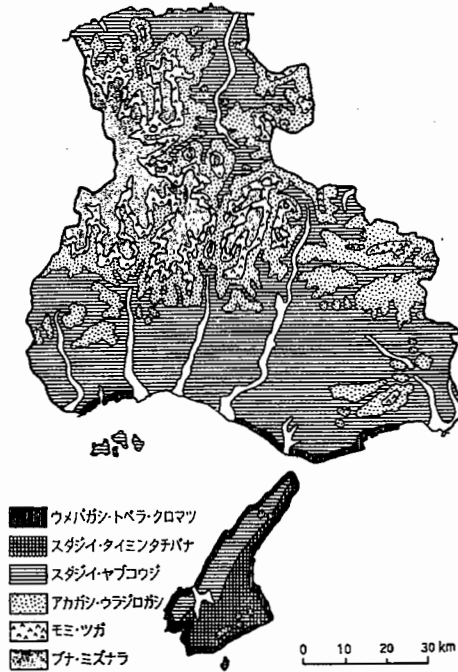


図4 縄文時代の兵庫県の森林分布図

出所:『兵庫県史 第1巻』より

ii. 検証1

ここでは、上で述べた仮説に対し、遺跡の出土物の面から考察し、検証していく。

兵庫県の縄文前半期を代表する生活遺跡として、養父郡関宮町の別宮家野遺跡(標高693m)がある。この遺跡から、縄文時代早期の住居跡などとともに、磨石・凹石・叩石が数多く出土し、さらにクルミとカシの実が炭化した状態で発見されている。

クルミはそのまま食べることができ、カシもあく抜きが必要ではあるが食べられることから、食用とされなかったとは考えにくい。また、上記の石器類は、堅果類の食料への利用を意味し、250点という出土量から、その依存度の高さがうかがえる。

また、早期・前期を中心とし、晩期まで継続された神鍋遺跡(標高330~360m)では、前期の住居跡とともに、石皿、炭化したカヤの実が発見されている。カヤは針葉樹であるが、その実は火を通すことで食べられることから、食料として利用されたのであろう。この遺跡では、早期から晩期までの土器が出土するが、住居跡は前期のものが確認されているのみで、中期以降のものは見つか

っていない。

以上のことは、仮説の信憑性を高めるものではあるが、数が少なく、断定するまでは至らない。今後の新たな発見に期待したい。

(3) 仮説と検証2

i. なぜ中期以降に遺跡の低地進出が見られるのか

中期以降の遺跡の低地進出は、但馬の遺跡分布図からだけではわかりにくいですが、第1章で述べたように、中期以降の遺跡の低地進出は兵庫県以外の県でも見られる傾向であり、但馬の遺跡においても同様の傾向が見られる。

概観のところで述べたように、前半期に比べ後半期の但馬の遺跡は東よりに分布している。これは平面的な位置の移動ではなく、標高差のある、立体的な移動であった。先にあげた仮説1をふまえ、この移動もやはり縄文人の食料獲得への願望が働いた結果であるとする、2つの仮説が考えられる。

1つ目の仮説は、それまで獲得できていた食料資源が充分量を得ることができなくなったため、移動したのではないかというものである。

縄文中期の寒冷化によって、但馬山間部の植生に変化が生じ、それまで採集できていたクルミ・クリなどの落葉広葉樹林の堅果類が、充分な量採集できなくなったのではないだろうか。もしくは、同じく気候変動によって、狩猟対象の獣類が減少したことも考えられる。

2つ目は、前半期とは別の食料資源の利用が可能となったのではないか、という仮説である。

東北地方で前期ごろに開発されたこととされる、あく抜き技術(安田, 1992)が兵庫県に伝わった、あるいは別に開発されたことにより、植物性食料の利用が拡大したのではないだろうか。食料を確保できる土地が限定されていた時代から、別の土地でも生活可能な量の食料が獲得できるようになったならば、より暮らしやすい土地に移動するのは当然のことであろう。対馬海流の流入以後、日本海側、特に中国山地の山間部では雪が多く、生活しやすい場所とはいえなかったであろう。

ii. 検証2

縄文時代中期がはじまる約5000年前、日本は寒冷化気候にみまわれた(安田, 2002)。この寒冷化は兵庫県の植生に影響を及ぼしたのかどうか、残念ながらわからない。もし影響があったとすれば、おそらく温帯針葉樹林への一時的な変化であったと思われる。同じように、獣類に対しても、寒冷化したことが影響を与えたかどうかは、出土物からは明らかにできない。

縄文後半期の代表的な遺跡に中谷貝塚がある。ここまで述べたように、兵庫県内では珍しい貝塚であり、断続的ながら中期半ばから晩期まで続いている。この遺跡から、魚貝類・獣類の遺物に混じって、トチとドングリが出土している。また、中谷貝塚と同じく豊岡市内の貝塚である長谷貝塚からは、後期ごろのトチ・ノブドウが出土している。

しかし、中期の遺跡である高砂市の日笠山貝塚では、魚貝類・獣類は出土しているが、植物のものは出てきていない。中谷・長谷の両貝塚でも、様々な魚貝類・獣類が出土しており、植物性食料への依存度はそれ程高くなかった可能性がある。ただし、トチ・ドングリは、どちらもあく抜きを必要とすることから、遅くとも中期半ばにはあく抜き技術を持っていたことはわかる。

ここでは、仮説について具体的な証拠は全く見つからなかった。しかし、縄文人たちが住み慣れた土地を離れるからには、何らかの理由があったことは確かであろう。

おわりに

兵庫県における縄文遺跡の分布とその背景について、気候、植生といった自然環境の面から見てきた。仮説に対しては、結局結論を出すに至らなかったが、それは今後の調査、研究にて明らかにされることを期待したい。

はじめに、のところで述べた、環境と遺跡分布との規則性については、仮説の域を脱することはできず、また兵庫県という限られた範囲内ではあったが、内湾がほとんど形成されなかった、山間部には温帯落葉樹林が広がっていたという条件下で、縄文人は植物性食料を頼って山間部に集まった、という考えを導き出せたことが成果といえる。

参考文献

- 神崎勝(2002):「加古川水系と古代文化」, 東但馬の歴史を考える実行委員会編『東播磨の歴史 1 古代 いにしへの風光を伝えて』, 神戸新聞総合出版センター, pp.16-20.
- 安田喜憲(1992):『日本文化の風土』, 朝倉書店p76, p.78, pp.89-92, p.97.
- 安田喜憲(2000):『大河文明の誕生』, 角川書店pp.292-293, p.297.
- 兵庫県(1974)『兵庫県史 第1巻』, 987p.
- 兵庫県(1992)『兵庫県史 考古資料編』, 878p.
- 兵庫県教育委員会(2000):『兵庫県遺跡地図 第1分冊』, pp. 132-193.
- 兵庫県教育委員会(2000):『兵庫県遺跡地図 第2分冊』, pp. 2-29.

A distribution of the Jomon ruins in Hyogo Prefecture and its background.

Fukuoka Takeshi

Keywords: Jomon Period, environment, existence, distribution of ruins, Hyogo Prefecture